

写真：「小6児童対象中学校体験」川西中学校区(写真の説明は5ページ)



「授業体験」



「いじめ見逃しゼロスクール集会」



「部活動体験」

巻頭言 『居心地のよい学級づくりとウェルビーイング』 教育センター指導主事 八重沢 央

「ウェルビーイング」ここ最近よく聞かれるようになったと感じる言葉です。令和5年6月16日付「新たな教育振興計画の策定について（通知）」中に、記載されていますが（※）、日本社会に根差したウェルビーイングの要素として「幸福感（現在と将来、自分と周りの他者）」「学校や地域でのつながり」「協働性」「利他性」・・・などの項目が挙げられています。ここで注目することは、個人のみの幸福だけでなく、他者とのつながりやかかわりがウェルビーイングの重要な要素になっているという点です。自分自身の幸福感を育むとともに、人や集団とのかかわりの中で所属感や承認感、貢献意識などを育むことが重要であることを意味しています。

この「つながり・かかわり」の中でのウェルビーイングは、どこで育まれるのか、その中心は学校であり学級です。小学生から中学生の9年間で、集団の中での経験や学びが、その後の社会での生き方に繋がります。今、各学校では「居心地のよい学級づくり」を推進しています。児童生徒自身が安心して生活しながら、友人とのかかわりの中で、認められたり、励まされたり、気持ちを分かってもらえたり、協力や応援してもらったりなどという学びは、今の児童生徒のウェルビーイングを育むとともに、社会の担い手となる人を育む上で大切な教育活動であると言えます。

さて、9月29日（金）に、川西中学校の中沢 覚 先生がエキスパート教員研修として構成的グループエンカウンターを用いた学級づくりを公開してくださいました。

その内容は・・・、**学習指導班のページ後段へ続く！**

※ウェルビーイングとは身体的・精神的・社会的に良い状態にあることをいい、短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義など将来にわたる持続的な幸福を含むものである。また、個人のみならず、個人を取り巻く場や地域、社会が持続的に良い状態であることを含む包括的な概念である。

小中一貫教育

十日町市の小中一貫教育は、3つのつながり（児童生徒のつながり、教職員のつながり、地域とのつながり）を大切にしています。つながりの中身は、それぞれの中学校区の特長を生かした取組がなされています。今回は、児童生徒のつながりと教職員のつながりを紹介します。

■ 特別支援交流会（11/21 2・3限 南中学校区）

川治小学校と西小学校の特別支援学級在籍の高学年の児童が南中学校の特別支援学級を訪問する形で行われました。初めは緊張気味だった小学生もゲームや校内散策等を通して次第に表情が緩み、顔見知りが増えたり、校舎に慣れたりすることにより、中学進学への安心材料になると思われました。迎え入れ側の中学生も、全体進行やグループリーダー等の役割をはきはきとした言葉で立派に果たしていました。中学生にはリーダーシップを発揮する貴重な場であったと思います。



交流活動「風船バレー」

また、先生方も他校の児童生徒の生の姿を見ることによって、教職員の年度末や年度途中の特別支援に関わる情報交換が、より具体的に充実したものになると思われま

す。特別支援交流会は、多くの中学校区で行われています。小中一貫教育の視点からもとても有効な活動であり、それぞれの学校の状況に合わせながら有効な取組を進めていただければと思います。

■ 小中合同研修会（11/21 下条中、11/27 下条小）

下条中学校区では、11月21日には下条中学校で、27日には下条小学校で授業公開を行い、合同研修会を行っています。21日に下条中学校を訪問しました。

授業公開

下条中学校 1年生 数学「一次方程式の利用」

授業者 中町 毅 先生



授業公開後の協議会

下条中学校区では、9年間を通して「気付き、考え、行動する子どもの育成」を目指しています。中町先生は、この目標に向かう中で「授業では表現することに控えめな生徒が多い」という傾向に対して、グループ活動や答えがオープンな問題づくりを手立てにして授業を公開されました。

協議会では、中町先生の授業に対して、グループで熱心な協議が行われ、各グループからの発表で、たくさんの視点からの意見を共有することができました。

さらに、下条中学校区の目指す「気付き、考え、行動する子どもの育成」に対して、参加者が日頃どのような手立てで取り組んでいるか紹介し合いました。

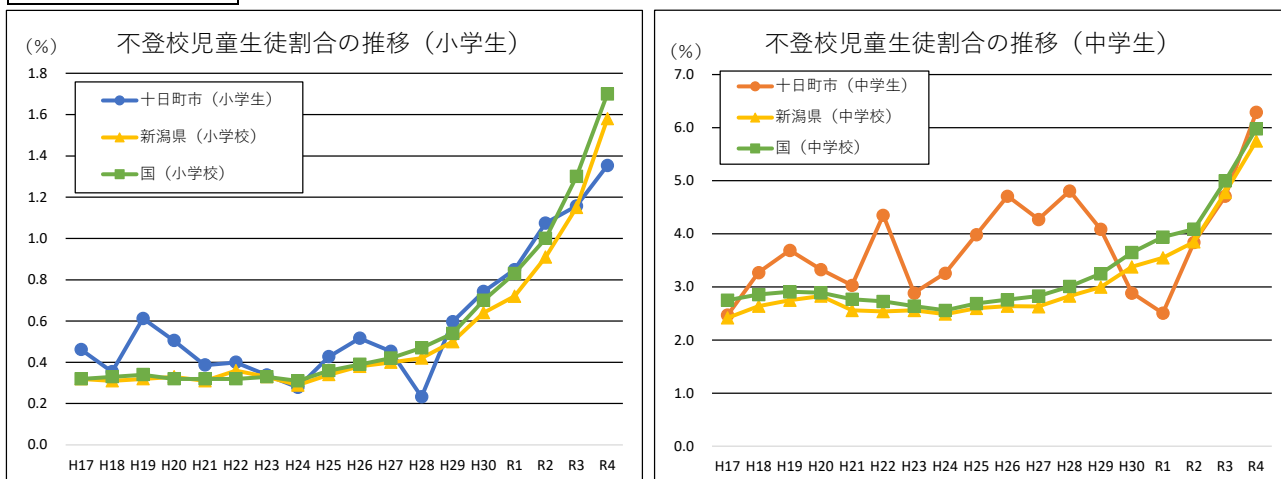
9年間を通した学びを小中学校で共有して進めていくということはなかなか難しいことであり、今回の下条中学校区の取組のように具体的な児童生徒の姿を通して語り合い、有効な手立て等を積み重ねていくことが有効な手段であると感じました。

教育相談班より

令和4年度不登校・いじめ認知の状況（国・県との比較から）

10月4日、文部科学省より「令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」の結果が公表され、国や県の状況が明らかになりました。

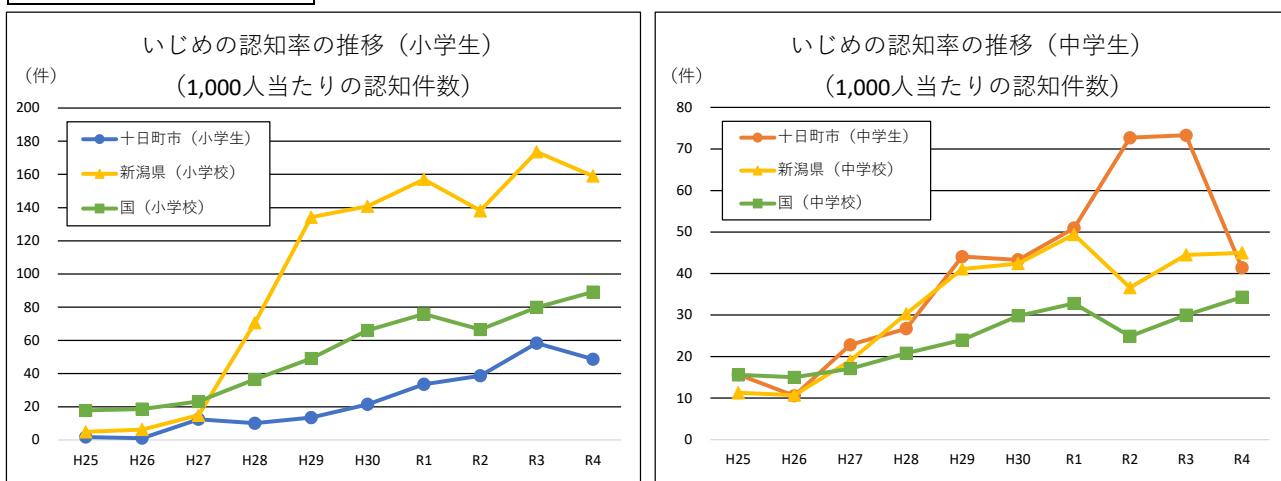
不登校の状況



不登校児童生徒の割合は、国・県と同様に十日町市も増加傾向です。十日町市は、小学生で国・県より若干低く、中学生は国・県より若干高い傾向にあります。不登校児童生徒が学校内外の機関※で相談・指導等を受けられるよう、個々の状況に応じた対応が求められます。

※ 学校内外の相談機関は、教育相談センター、児童相談所、病院、市関係課、養護教諭、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、相談員、など。

いじめの認知状況



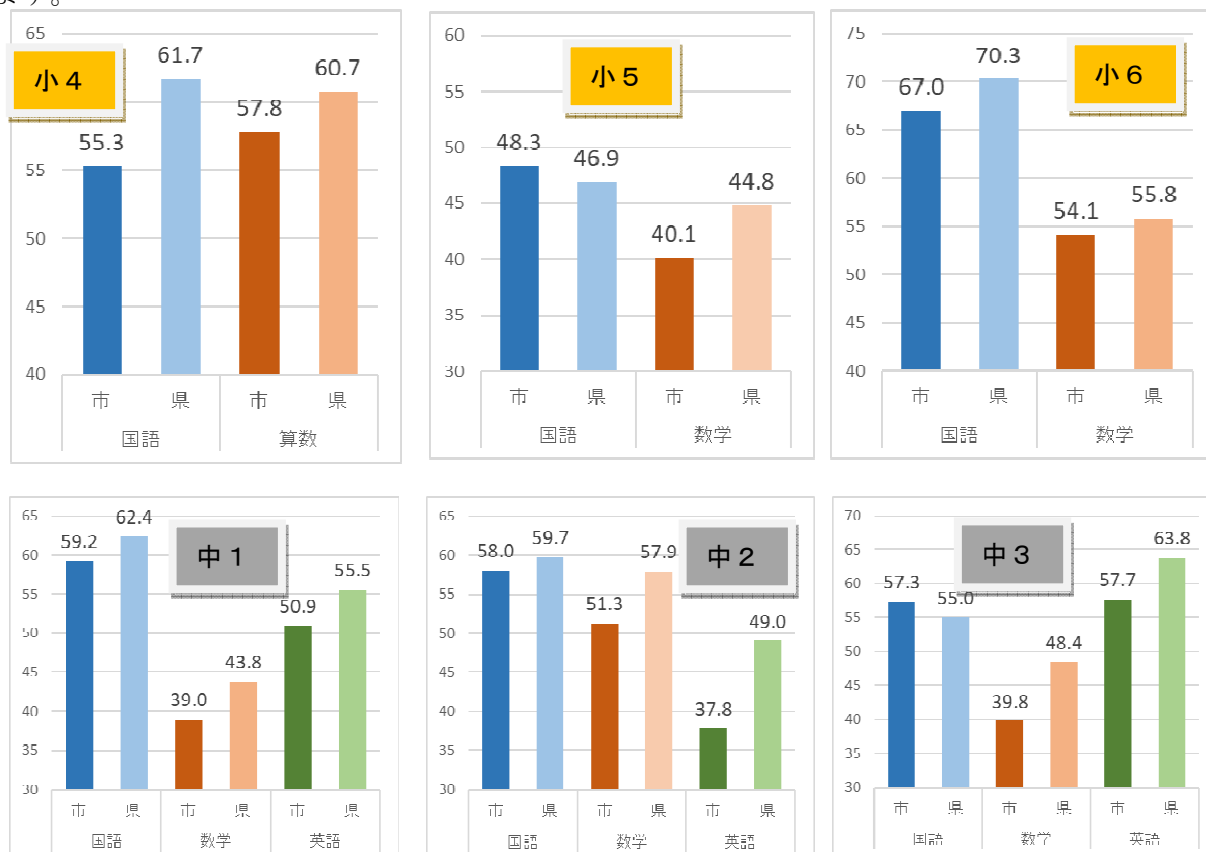
1,000人当たりのいじめ認知件数は、国は令和3年度より増加傾向、県は小学校で減少し中学校で若干の増加となっています。十日町市は、令和4年度は減少に転じました。中学生に比べ、小学生は国・県より低い傾向にあります。小学生の早い段階から積極的に認知し、早期対応していくことが求められます。その際、いじめ防止対策推進法に基づき、「いじめ」として取り上げるべきものは確実に取り上げ、チームとして対応していく必要があります。また、いじめを認知した後は、見守りを継続するなど丁寧に対応するとともに、3か月を目安として本人及び保護者に解消確認をする必要があります。

学習指導班より

にいがた学びチャレンジ 第2回の結果

グラフは、2回目のにいがた学びチャレンジにおける市と県の正答率の比較です。小学5年生・中学3年生の国語は県を上回っていますが、その他の教科等は県を下回っています。中学生の数学と英語については、県との差が大きくなっています。

4月のNRT学力調査だけでは、日頃の取組の成果を把握することは、なかなか難しい面があります。2カ月に1度実施されるにいがた学びチャレンジの取組を生かし、学力の状況把握とともに対話的な学びと振り返りを通して、児童生徒の学力定着に努めてください。3回目・4回目の向上していくことで、次のNRTの結果にも繋がると考えています。よろしくお願いします。



<巻頭言の続き> その授業では、生徒同士の良好な関係性の形成を活動目標として、2つのプログラムを実施していました。中沢先生の自己開示から始まった授業は終始穏やかな雰囲気の中で進んで行きました。1つ目のプログラムは「自分が大切にしている言葉」を紹介し合う活動、2つ目はカードゲームを用いた「感情表現発信受信活動」で、同じ言葉をいくつかのシチュエーションに合わせて表現する活動でした。相槌をうつスキルも学びながら、対話する力や適切な表現方法、相手の心情を感じ取る力を育む授業が展開され、まさに人とかかわりから生まれるウェルビーイングを高める時間になりました。

授業を参観し「居心地のよい学級づくり」は、現在から未来へと続くウェルビーイングの向上に大きく寄与すると強く感じた次第です。各校で工夫して取り組んでくださっていることに感謝しながら、いつもより長くなってしまった巻頭言を閉じます。



学校教育課・教育センター事業のお知らせ ～12・1月～

日 時	内 容 ・ 会 場	備 考
12月 6日	「居心地のよい学級づくり」2回目の結果について	対象:校内推進員 Zoom(オンライン)

【表紙写真の説明】掲載許可

中学校進学前の6年生の児童から「中学校の授業はすごく難しいのでは」「部活動は楽しみだけどついていけるか」といった様々な不安が聞かれ、各中学校区で不安を和らげ、期待を膨らませるような取組がなされています。

今回は、川西中学校区の取組を紹介します。11月10日に千手・上野・橘の3小学校から、6年生児童が川西中学校に集合して実施されました。

初めに 数学・英語から児童が選択して参加するが授業体験行われました。「今日は授業が一番の楽しみ」という児童もあり、終了後には「楽しかった」という声が多数聞こえました。

次の地域住民や6年生の保護者が参観する中の「いじめ見逃しゼロスクール」では、運営する中学校の企画委員やグループのリーダーの堂々とした姿から、憧れの思いをもったのではないかと思います。

また、部活動体験では、希望した5つの部活動に分かれて活動し、それぞれの部の活動内容を体験したり、雰囲気味わったりすることができました。

こういった各中学校区での取組が進学時のスムーズな「つながり」に寄与していると思います。